

同性愛者のカテゴリー化実践

早崎 一修

序章

「彼は同性愛者だ」という会話を聞くと、彼らがまるで「私は同性愛者です」と書かれた名札を胸にでもぶら下げて、いつでもどこでも常に彼らが同性愛者であるかのように聞こえる。つまり、私たちは〈同性愛者〉などといったカテゴリーをあたかも確定された所与のものとして、普段考えている。そして、今日の多くの社会学的研究⁽¹⁾がこの視点から進められているように思える。この種の研究のひとつとして〔中央大学文学部社会学科・矢島ゼミナール同性愛調査研究会 1996〕の研究があげられる。この研究は、同性愛者に対しての性的意識が成長過程の中で、いつ、どのように出現し、どのように変化していったのか、そして今どうなったのか、ということに留意して、同性愛者にインタビューを行い、そしてその録音データに基づいて〈Q and A〉方式でライフヒストリーにまとめたものである。このような研究は数多く存在している。しかし、社会生活を営む上で、彼らにとって〈同性愛者〉であることが常に有意味になっているというわけではない。彼らは（そして私たちも）、さまざまなカテゴリーの担い手でありうるのだ。たとえば、勤め先ではショップの店員であったり、病院に行けば患者であったり、さらには日本人であったりもする。上のような研究において研究対象者ははじめから〈同性愛者〉カテゴリーに属する者とみなされている。しかし、注意しなければならないのは、そうみなしているのは、あくまで研究者であって、参与者自身ではないという点である。そこに登場する研究対象者ははじめから〈同性者〉であるという想定によって説明されている。しかし、カテゴリーというものは相互行為に先立って存在するものではなく、相互行為のなかで参与者たちに顕在化するものなのだ。

そこで本論文では、会話の参与者が同性愛者のどのような振る舞いを〈同性愛者〉として認識しているのか、また逆に、〈同性愛者〉であると参与者に認識されるために、彼らはどのように振る舞っているのか、ということ、つまり〈同性愛者〉カテゴリーが、当の参与者たちにとって、また彼らのやりとりの中で、どのようにして有意味（レリヴァント）となっているのか、このことを実際の現象を通して示していきたい。それと同時に、カテゴリー化活動がどのような振る舞いと関連しているのか、また人々がどのようにして知識や態度の期待を承認し合っているのか、という期待の構造も見ていく。その際、私はサックスたちの提案した会話分析（あるいは相互行為分析）という手法を取ろうと思う。

「会話分析は、サックスたちがはっきり言うように、言語そのものの研究ではない。それはあくまでも、会話をフィールドとした、社会的行為の組織に関する研究である。この基本的な構えには、すでにひとつの強い主張が含まれている。会話において起こることは、しばしば、当の会話に参加している当人たちにより行われることである。しかも、それは協同で（相互行為的に）行われるのだ。」〔西阪、1995a : 101〕

それ故に、本論文は、同性愛者のネットワーク調査、アンケートによる同性愛者の意識調査、あるいは調査者がフィールドワークに出て感じて来たことを書き綴ったエスノグラフィなどといった、同性愛者に関する実態調査ではない。だがしかし、本論文は「実態」

調査である。それは、経験的な一般化を求めたり、あるいは検証可能な仮説の構築をめざすための材料の獲得を目的とするという意味で、「実態」調査なのではなく、私たちが日常生活において実際に何をどうやっているのかを、すなわち社会の「実際の現象」の中の社会秩序を解明しようとする調査であるという意味で、「実態」調査であるのだ。

本論文は、成員自身によって社会秩序がそのつどその場その場で編み出されていく様子を、とりわけカテゴリーに着目して実際に示して見せようとする試みである。

1章 調査概要

今回、会話データを入手するにあたって、東京都新宿区二丁目で録音を行った。フィールドとして新宿区二丁目という場所を選んだのは、そこに同性愛者が経営し、かつ彼らによって利用されている飲食店が多く集まり、ひとつのコミュニティーを形成しているが故に、同性愛者の方と出会いやすく、調査の了解も得やすいのではないかと、という期待から便宜上その地を選んだ。そして、今回の調査で、以下の3氏に調査に協力していただくことができた。

D氏・・・医師（大学病院勤務）

M氏・・・ショットバーYのマスター

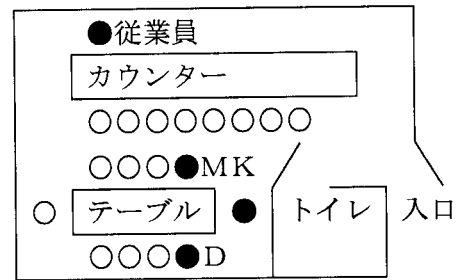
S氏・・・某宗教団体内で同性愛者の権利獲得運動に参加している方

そして、以下の3つのタイプの会話データを入手することができた（ただし、本論文では、相互行為の組織化の特徴をより多く確認することのできた、タイプ2の会話データのみを扱った）。

- タイプ1： D氏へのインタビュー・・・1h
場所：新宿2丁目のショットバーX
（男性のみが入店可能）
日時：1999年8月上旬
これは、ショットバーXでD氏に調査に協力してくれるようお願いし、その時のインタビューを録音したものである。
- タイプ2： D氏、M氏、私の三人・・・2h
による会話
場所：新宿2丁目のショットバーY
（男女とも入店可能）
日時：1999年8月上旬
これは、D氏の紹介でM氏が経営するショットバーYを訪れた時に、私を含めた三人の会話を録音したものである。
- タイプ3： S氏へのインタビュー・・・2h
場所：吉祥寺の喫茶店Z
日時：1999年8月上旬
これは、M氏に紹介してもらったS氏へのインタビューを録音したものである。

ショットバーYで録音した、タイプ2の会話場面における、席の配置は下図の通りである。

図1 ショットバーY
における席の配置



2章 サックスのカテゴリー論とレイベリング論に関する若干の考察

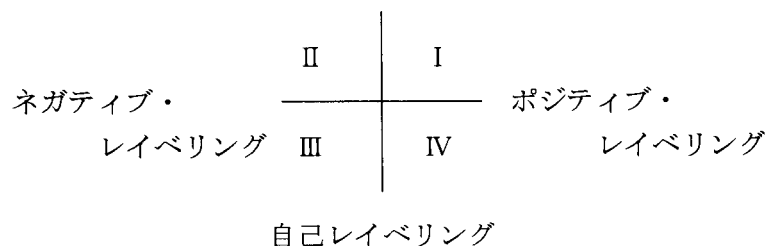
従来のレイベリング論は、そのレイベリング・プロセスを、まず「自己の先行行為」が現れ、次にその行為に対して「他我の裁定」が行われ、そして「自己の後続行為」がそれに続く、といった相互作用過程として把握し、研究を進めてきた。そして、なかでもとりわけ逸脱、犯罪、非行、などのレイベリング現象を扱ってきた [cf.大村、宝月 1979 : 33]。

だが、[佐藤恵 1996 : 115-127] は次のことを主張している。従来のレイベリング論は、否定的⁽²⁾なサンクションを伴うレイベリング現象ばかりを扱い、肯定的なサンクションを伴うレイベリング現象を主題的には扱ってこなかった。そこで、佐藤は肯定的なサンクションを伴うレイベリング現象をポジティブ・レイベリングとして概念化し、それを社会的価値規準に照らしてポジティブとされる価値評価を随伴する社会的カテゴリーを特定の行為とその行為者に対して付与し、それに基づく待遇を行う相互作用上の一連のプロセスと定義している。また、従来のレイベリング理論が、社会的ポジティブ・レイベリング(図2のI)に、被レイベリング者の自己定義を無効化する抑圧性が存在すること、そして社会的ポジティブ・レイベリングが自己ポジティブレイベリング(図2のIV)へと深化し、他者や社会に対するクレーム申し立てではその抑圧が解消しえぬ事態となること、の二点を看過してきたことを指摘し、この二点を包含したレイベリング理論の概念枠組みを構築することの必要性があると唱えている。

図2 ポジティブ-ネガティブ・レイベリングと社会的-自己レイベリングとの関係

社会的レイベリング

[佐藤、1996 : 119]



さらに、佐藤はどのような点においてポジティブ・レイベリングがことさら問題にならないか、ということについて次の三点をあげている。第一に、ポジティブ・レイベリングをネガティブ・レイベリングと同型の相互作用過程と理解することができるという点(社会学的分析対象としてのポジティブ・レイベリング)。第二に、ポジティ

ブ・レイベリングがレイベリングであることに由来する、被レイベリング者のアイデンティティに対する抑圧性に関する社会学的研究があまり蓄積されていないという点（抑圧的相互作用関係としてのポジティブ・レイベリング）。そして、第三に、ポジティブ・レイベリングによる自己抑圧が、他者に対するクレーム申し立てでは解決できない不可視的問題経験として把握される、という点である（不可視的問題経験としてのポジティブ・レイベリング）。

次に、佐藤が主張するポジティブ・レイベリングというものが具体的にどのようなものか、を見ていこうと思う。まず、自己の先行行為に対して、他者がポジティブ・サンクションを行う。その際に付与されたカテゴリーに随伴するポジティブな人格評価をそのまま受容すると、それを支持する後続パフォーマンスを遂行し続けなければならないという苦痛が生じることとなる。これを、佐藤は「期待が重荷」型のポジティブ・レイベリング、あるいは社会的（＝自己－他者関係における）ポジティブ・レイベリングと呼んでいる。そして、この種のポジティブ・レイベリングが経験的に反復されると、レイベリングが自己過程内部に食い込み、自己自身が抑圧主体となり、それ故に、他者に対するクレーム申し立てという手段で抑圧を解消することが困難になっている。これを、佐藤は「良い子がやめられない」型のポジティブ・レイベリング、あるいは自己（＝自己－自己関係における）ポジティブ・レイベリングと呼んでいる。このようにポジティブ・レイベリングプロセスにおいて、はじめは他律的規範として受容していた、時間的に先行する自己外部の抑圧的視点が、自律的規範として自己内部に取り込まれることで、クレーム申し立てが不可能になり、行為と人格との相互参照関係を増幅させる駆動力となっていく。すると、行為者にとっては、自己の行為によって絶えざる価値証明を行い続けるエスカレーションに投げ込まれたこととなり、それが逆に、価値証明を行わなければ自己は無価値であるという自己定義を強化することとになっていく。佐藤が主張するポジティブ・レイベリングとは、このようなものであった [cf. 佐藤、1996 : 120-125]。以上のことをまとめると、図3の様になる。

以上のことを要約すると、それがポジティブであろうがネガティブであろうが、レイベリングには、他者によるサンクションが期待を織り込んだ後続行為を行為者に遂行せしめるという意味で、抑圧性というものが伴い、そしてとりわけ自己ポジティブレイベリングにおいてはクレーム申し立てではその抑圧性が解消しえぬため厄介である、ということである。

この佐藤の考察は、カテゴリーに付随する人格評価が肯定的／否定的であるということとは独立に、それを支持する後続パフォーマンスを遂行することが期待されている、つまりそれがどんな種類のものであってもカテゴリーには一定の活動が結びついていることを発見しているという点で、大変重要であり、評価に値する。

しかし、佐藤の議論には、次のような二つの矛盾が存在する。第一に、レイベリング（あるいはカテゴリー化）の際に、被レイベリング者のアイデンティティに対して抑圧性が伴うという主張は、当然のことを言っているにすぎない。というのも、そもそもカテゴリーの性質上、カテゴリーを付与されたものは必ずある一定のかかわり方をすることが期待されているからだ。サックスは、特定のカテゴリーに一定の活動が結びついていることを、観察している（このことについては、4章で詳述する）。それ故に、レイベリングには抑

圧性を伴う、などと言うことは、ほとんど無内容なトートロジー（同語反復）でしかない。つまり、行為を拘束するカテゴリー化によって、後続行為が拘束される、と言っているにすぎない。私たちが問わなければならないことは、そのようなレイベリングによる抑圧がアイデンティティを「抑圧」するものであると、どのようにして人々に認識されているのか、ということだ。つまり、そもそも「抑圧」がなされたという決定はどのようにして下されるのか。あることがらを「抑圧」だと言うことができるためには、その事柄はどのように捉えられなければならないのか。これらのことが解明されなければならないのだ。サックスは遺された講義録の随所で次のように嘆いている、と〔cf.西阪、1997a：30〕は述べている。社会学者は、自ら作り上げた「仮説」しか相手にしておらず、社会の「実際の現象」を扱っていない、と。第二に、佐藤は社会的—自己ポジティブ・レイベリングの違いについて、他律的規範と自律的規範との観点から説明している。すなわち、他者によって規範が導入されるものを社会的ポジティブ・レイベリングとし、自己によって規範が導入されるものを自己ポジティブ・レイベリングとしている。ここに行行為者の意図を前提として話が進められていることは見やすい。しかし、〔西阪 1998：210-211〕も言うように、「活動・行為に先立っていつも『意図』なるものがなければならない、と仮定することは、たちどころに背理を帰結する。わたしの活動の意味は、わたしがその活動とは別にその時何を意図していたかによって与えられるとしよう。こう仮定するとき、わたしの活動が有意味であるためには、その意味を与えている意図も有意味でなければなるまい。暗雲に何でも意図してよいのであれば、その活動の『意味』は出鱈目となり、結局その活動は意味不明なものとならざるをえない。もし意図することが有意味なものでなければならぬとするならば、その意図の意味は何によって与えられるのか。それは、その意図に先立って、第二の意図（その意図はどのような意図でなされたか）がなければならないことになる。ここから、意図の無限背進が生じることは見やすい。つまり、結局、いつまでも意図し続けるだけで、実際の活動・行為がなされることはなくなってしまふ。」このように、レイベリングあるいはカテゴリー化は必ずしも人々の意図によって行われているのではない。

以上のことから、つぎのように言うてよいと思う。すなわち、佐藤の議論及びレイベリング論は背理である。では、人々はどのようにしてレイベリングあるいはカテゴリー化というものを行っているのだろうか。

今まで私は「レイベリング」と「カテゴリー化」というものを便宜上、同義語のようなものと扱って話を進めてきた。だが、本来はレイベリングとカテゴリー化（ただしサックスのカテゴリー論に基づくもの）とでは、まったくその性質を異にするものである。レイベリングは“レイベルを張りつける”という意味で、先に述べたことと同じように、活動や行為が人々の意図から成り立っていること、を前提としていることは見やすい。しかし、サックスのカテゴリー論に基づくカテゴリー化は、そのカテゴリーに付随する一般的期待⁽³⁾というものをベースにしている。カテゴリーの担い手は、カテゴリーの担い手間の関係に関する一般的期待に従って、一定の知識・経験を優先的に報告する権利を互いに配分し合うことにより、その担い手であることを協同的に成し遂げているのである。つまり、カテゴリーの担い手であることは、担い手が相互行為を通して実際にやっていることなのだ。そして、そのときに問題となるのは、カテゴリー適用の「正しさ」と「適切さ」に関

する議論である。サックスはこのカテゴリー適用の「正しさ」と「適切さ」との違いについて、まじめに注目した。たとえば、私が日本人であることは、いつも正しい。しかし、私が日本人であることが、いつも適切であるとはかぎらない。たとえば、私が「同性愛者」について語るとき、私が日本人であるかどうかは、どうでもよい、というわけだ。

このようにいきなり言われても、すぐにはピンとこないかもしれない。しかし、私がこの論文を通して示していきたいことはまさしくこのことだ。3章では、カテゴリー適用の「適切さ」と「正しさ」との違いについて述べ、今回の調査が同性愛者を対象としたものであるからといって、そこでの参加者たちのやり取りの中で、必ずしも「同性愛者」カテゴリーが適切になっているというわけではないことを示す。4章では、「同性愛者」カテゴリーがどのようにして適切になっているのかについて、またカテゴリーが適切であるということはどういうことなのかについて示したいと思う。

図3 社会的—自己ポジティブ・レイベリング・プロセス

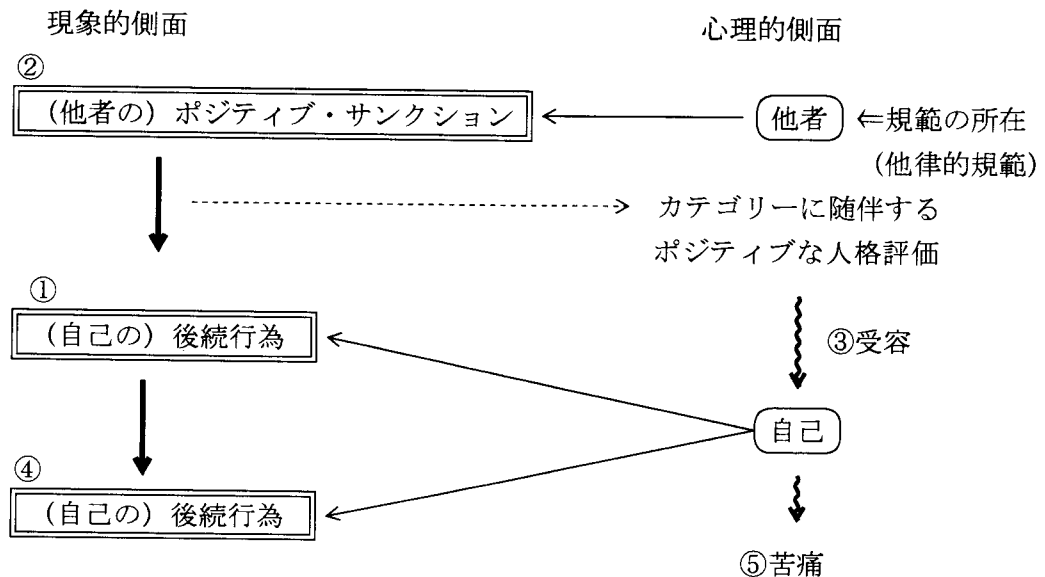
○図の見方

○内の数字：レイベリング・プロセスの順序を示す

□ : 現象としての行為を示す

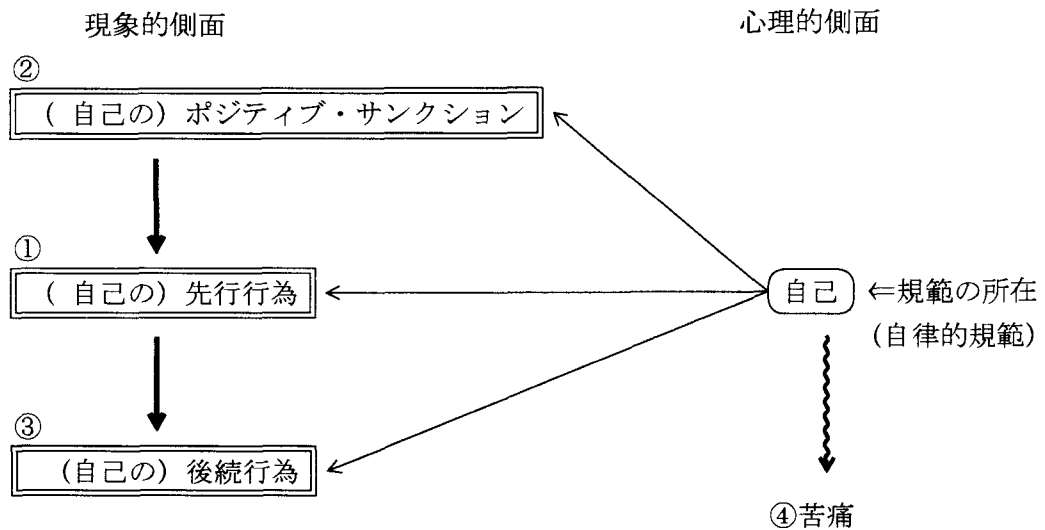
○ : 行為主体を示す

○社会的ポジティブ・レイベリング・プロセス



以上のような社会的ポジティブ・レイベリングが経験的に反復されると、以下のような自己ポジティブ・レイベリングに深化する。

○自己ポジティブ・レイベリング・プロセス



3章 カテゴリー適用の「適切さ」と「正しさ」

この章では、サックスがカテゴリーに関する議論 [cf.Sacks,1972] の中で注目したカテゴリー適用の「適切さ」と「正しさ」との違いについて一段掘り下げて考察してみたい。

データ1は、同性愛者Mが開いているショットバーYに、K（調査者）が以前知り会った同性愛者Dと訪れたときのものであり、Dの紹介で調査の了解をえ、Mに「調査依頼書」を読んでもらった次の場面の会話を、トランスクリプト⁽⁴⁾にしたものである。

データ1（タイプ2-8/8②B面）

- | | | |
|-------|----|--------------------------------------|
| 1 | D: | =それで、その趣旨を |
| | M: | で、う（.）う::ん何を聞きたいの？= |
| | K: | あの::（3）まっその:: |
| <hr/> | | |
| 2 | D: | |
| | M: | （略） |
| | K: | 何て言えばいいんだろ（.）その同性愛者、同性愛者って |
| <hr/> | | |
| 3 | D: | |
| | M: | うん（.）これはまだあなたが何が聞きたいっていうのが自分の中でまだ決めて |
| | K: | |
| <hr/> | | |
| 4 | D: | えっ（.）でもさっき |
| | M: | ない（1）う::ん （1） うん |
| | K: | 言ってること（ ） |

- 5 D : 言ってたじゃ::んなんかあの:: (.) ぼくもちょっとこれ分かんなくて::で::具体的
M :
K :
-
- 6 D : にたとえば何が::とりあえず何が聞きたいかって言うのを聞いたら::どういうふ
M : うん うん
K :
-
- 7 D : うに何だっけどういうふうに (1) どういうふうに分けてるかっていうの
M : どうい
K :
-
- 8 D :
M : うふうに分け//て
K : //実際 (.) 実際そ::当事者がどういうふうにその:: (.) なんていう
-
- 9 D : のかな::
M :
K :

データ1は、Mに「で、う (.) う::ん何を聞きたいの?」(1段落目M行)と問われたKが、その質問に上手く答えられないでいると、「これ(調査依頼書)はまだあなたが何が聞きたいっていうのが自分の中でまだ決めてない」(3段落目M行)とKがこれから行おうとしている調査に対して批判され、なんとかMに調査の内容を理解してもらおうとしている場面である。

まず、1段落目でDは、Mの行った会話の参与の枠組み⁽⁵⁾から外される可能性を持つカテゴリー化を、MやKと協同で修正し、会話の参与者であることを維持している。このように言えるのは、次のような点を観察することによってである。

1段落目M行で、Mは「で、う (.) う::ん何を聞きたいの?」とKに質問している。ここで隣接ペア⁽⁶⁾の規則に従うならば、順番としてMの「質問」のあとにKの「返答」が来るはずである。しかし、ここでは通常Kの「返答」が入る順番に(つまり、Mの「質問」のすぐあとに)「それで、その趣旨を」とMの質問に答えるようKを促す、Dの「指示」がきている。そして、そのあとにKの「返答」が位置している。これはどういうことなのか。

まず、ここでMはこの調査において自分に具体的に何を聞きたいのかをKに尋ねることで、自分自身を調査の「被依頼者」として、そしてKをその対概念にあたる調査の「依頼者」としてカテゴリー化し、自分の「質問」に対するKの「返答」を期待している。つまり、Mの発話(「質問」)の段階では、対照的なカテゴリー対⁽⁷⁾(調査の「依頼者/被依頼者」)が有意味(レリヴァント)になっているのである。しかし、次の発話の順番にきて

いるのはKの「返答」ではなく、Dの「指示」である。DはKを「指示」することで次の発話の順番がKにあることを指示しているが、KはDに「指示」されなくともそもそも発話の順番が自分にあることぐらいすでに分かっている。このことは、順番取りシステムの運用規則 (turn-taking system) ⁽⁷⁾ と関係がある。Dの「指示」の直前に、Mは「質問」をしている。「質問」をするという行為はそれだけで単独に成り立っているのではなく、必ず「返答」という行為を伴う。それが「質問／返答」という隣接ペアである。そして、一旦この隣接ペア（「質問／返答」）が適用されると、同時に順番取りシステム規則1 (a)（他者選択）が適用される。つまり、「質問」をするという行為は「返答」を求める行為であるだけでなく、一旦自分の発言をやめ、次の話し手を選択し、発言の順番を交替するという行為でもあるのだ。それゆえ、(Dの「指示」の直前に発話された) Mの「質問」は、次の順番を取って発言する権利をえ、かつその義務を負う者、つまり、次の話し手としてすでにKを選択しているのである。

それでは、ここでのDの「指示」は単なるお節介なのだろうか。すでに述べたように、この1段落目で、MがKに調査において具体的に何を聞きたいのかを「質問」することで、MとKの間に、調査の「依頼者／被依頼者」というカテゴリー対がレリヴァントになっている。しかし、逆に言えば、このカテゴリー対はDに対してはレリヴァントになっていない。つまり、会話の参与の枠組みから除外されてしまっているのだ。そこで、Dは参与の枠組みの中に留まるために、調査の趣旨を説明するようにKを「指示」し、次の発話の順番がKにあることを明示することで、自分を、MとKを「仲介した者」として、そしてMとKを、Dによって「仲介された者」としてカテゴリー化している。そうすることで、この場に居合わせている3人全てにレリヴァントになる「仲介者／被仲介者」というカテゴリー対を適用し、会話の参与者であることを維持しているのである。それゆえ、Dの「指示」はお節介なのではなく、「仲介した者」ならば「仲介された者」達の会話の進行を司る資格を持っているであろう、期待にそって発話されたものなのである。そしてさらに、KはDの「指示」に対し、Mの質問に「返答」するという形をとって、「従事」することで、またMはDの順番取りシステムの規則を無視した発話に何の反応も示さないことで、Dのこのカテゴリー対（「仲介した者／被仲介された者」）の適用を承認している。実は、この〈「質問」→「指示」→「返答／従事」〉といった発話のシーケンスが、今見てきた「仲介者／被仲介者」カテゴリー対を観察可能なものにしてしているのだ。以上のことをまとめると、図4、5の様になる。

このように、Dは自ら「仲介者」というカテゴリーをもちいることで、そしてMとKは「仲介者／被仲介者」というこの見方を承認することで、このカテゴリー対の担い手間の関係に関する一般的期待（「仲介した者」ならば「仲介された者」達の会話の進行を司る資格を持っているであろう期待）に従って、会話の参与の枠組みから外されないよう会話の参与者であることを、MやKと協同的に維持していたのである。

次に、3、4段落目を見てほしい。ここではMによって批判され、その答えに窮しているKに、Dが「助け船」を出しなるとか「調査」を続行可能なものにしようとしている様子がうかがえる。このように言えるのは、次のような点を観察することによってである。

まず、Mは「これはまだあなたが何が聞きたいっていうのが自分の中でまだ決めてない」（3段落目M行）と、調査の内容に関して、Kを「非難」している。そして、いくらかの

沈黙のあと、KはMの「非難」にうまく対応できず、「言っていること（ ）」（4段落目K行）と言い淀んでいる。ここで、もしKがMの「非難」をそのまま覆せず受け入れてしまえば、何を聞きたいのかがまだ明白でないため調査はここで終了、そして出直し、ということになってしまいかねない。そこで、Kの「言い淀み」に対して、Dは「えっ（.）でもさっき言ったじゃ::ん」（4段落目D行）と自ら発話の順番を獲得（順番取りシステム規則1（b）-自己選択）し「非難」することで、「助け船」を出し、なんとか調査を継続させようとしているのである。これらのことから、ここではDの「助け船」は、同カテゴリーに属するものであるならば語られている知識について修正できる資格を持つであろう、期待にそって発話されたものである、とすることができる。Dが本当に調査内容について理解しているかは疑わしい。実際、7段落目D行で調査内容の「説明」に行き詰まっている。しかし、ここで重要なのは、「えっ（.）でもさっき言ったじゃ::ん」（4段落目D行）と言うことで何をやったかである。Dは、Kを「非難」することで、なんとか調査を継続させようとしているのだ。それ故、この場面において調査内容を「知る者／知らない者」カテゴリー対がレリヴァントになっている、と言える。以上のことをまとめると、図6の様になる。

最後に、5～8行目を見てもらいたい。ここでは、突然「調査者／被調査者」カテゴリー対がレリヴァントになっている、とすることができる。まず、Dは「ぼくも・・分かんなくて・・で・・何を聞きたいかっていうのを聞いたら」（5～6段落目D行）と、ショットバーYに来る前にKから聞いた調査内容についてMに「説明」している。そして、Mはその「説明」に何度か「うん」（6段落目M行）と相槌をうち、話を先に進めるようDを促している。しかし、Dは途中で「説明」に行き詰まり、「何だっけ」（7行目D行）と言って、その行き詰まってしまったことをこの場の参加者たち（M, K）に提示している。そして、その後Mは「どういうふうに分け//て」（7～8段落目M行）と、発話の中に出てきた（Kから聞いた調査内容に関する事柄）を繰り返している。そして、KはそのMの発話に割り込むかたちで、自分が同性愛者の何を聞きたいのか、をDに代わって「説明」し始めている。

先に述べたように、「えっ（.）でもさっき言ったじゃ::ん」（4段落目D行）と発話した際には、Dは調査内容を「知る者」カテゴリーの担い手であった。しかし、このDの発話の後半部分（Mを志向して発話された部分）「ぼくもちょっとこれ分かんなくて・・・」では明らかにDは自分のカテゴリーを「被調査者」カテゴリーに切り替えている。というのも、Dの言及した「ぼくも・・分かんなくて・・で・・何を聞きたいかっていうのを聞いたら」という発話において、自分もMと同じくKに何かを聞かれる対象者である、ということが示されているからだ。このことは、「知る者」というカテゴリーには結びつかない。上記のような表現によってレリヴァントになるのは、「知る者／知らない者」ではなく、むしろ、「調査者／被調査者」というカテゴリー対である。Dによるこのようなカテゴリーの切り替えは、「被調査者」である自分が理解できたのだから同カテゴリーに属するMも理解できるであろう、期待にしたがったものであると考えることができる。Dはカテゴリーを切り替えることで、調査内容に関する「説明」をMになんとか理解してもらおうとしたのである。そして、Dの「説明」の行き詰まりの際、そのDのカテゴリー化に接続すべく、Mはその行き詰まってしまっているDの「説明」がまだ終了しないうちに、

自ら発話の順番を取得（順番取りシステム規則1（b）－自己選択）し、「説明」の要点を繰り返すことで、Dの「説明」をなんとか理解しようとしていることを提示している。これは、行き詰まりによって終了しそうな「説明」を、途中で「打ち切ら」ずに続けるようDを促すものになっている。しかし、その後KはそのMの発話に「割り込」んでいる。これは、「被調査者」よりも「調査者」のほうが、その調査内容についての知識を主張する優先的資格がある、という期待にそって行われたものである、と思われる。Kはこの期待に従って、「被調査者」カテゴリーの対概念にあたる「調査者」カテゴリーの担い手として、DとMの間に割って入り、行き詰まったやり取りに終止符を打ったのである。じつは、このKの「割り込み」こそが、D、Mが「被調査者」でありKが「調査者」である、というこの見方を決定的に裏付けるものとなっているのである。このようにして、「調査者／被調査者」カテゴリー対が協同的に達成されていた。それ故に、この場において「調査者／被調査者」カテゴリー対がレリヴァントになっている、とすることができる。これららのことをまとめると、図7の様になる

以上、三つの例を見てきた。一つ目の例は、Dが「仲介者／被仲介者」というカテゴリー対を用いることで、会話の参与の枠組みから外されないよう会話の参与者であることを、MやKと協同的に維持していた、というものであった。二つ目は、Kの「言い淀み」に対して、Dは「非難」することで「助け船」を出し、調査を継続させようとしていたものであり、そしてその場面において調査内容を「知る者／知らない者」カテゴリー対がレリヴァントになっていた例であった。三つ目は、Dが持ち込んだ「調査者／被調査者」カテゴリー対に結びつく期待に従うことで、Kがレリヴァントなしかたで「割り込み」を可能にした例であった。

今まで見てきたように、今回の調査が同性愛者を対象としたものであるからといって、必ずしも相互行為上「同性愛者」というカテゴリーが適切になっている、というわけではなない。どのようなカテゴリーが適切になるかは、その都度その都度の相互行為の具体的展開におけるさまざまな偶然的条件に依存しているのだ。さらに、あるカテゴリーがそこで適切になっていると言えるのは、そこが病院であるから「医者／患者」といったカテゴリーが、そこが学校であるから「教師／生徒」といったカテゴリーが、適切になっている、などといった単純なものではない。「医者／患者」というカテゴリーは病院の外においても適切になる場合もありうるし、「医者／患者」カテゴリー以外のカテゴリーが病院内で適切になりうる場合もありうる。では、相互行為内において何をもって（あるいは、何をコンテキストとして）あるカテゴリーがそこで適切になっている、と言えるのはいかにか。この問題については、カテゴリー適用の「適切さ」と「正しさ」との違いに関する、サックスの議論の中では、何も述べられていない。このことは、カテゴリー化の問題には一般的な解答が存在しないということを示している。つまり、シェグロフも「相互行為組織の様式それ自身をコンテキストとして扱ってみてはどうだろうか」[Schegloff, 1987]と提案しているように、カテゴリーの適切さというものは、会話という相互行為の中で、参与者があるカテゴリーを適切なものとするのに無限に存在するコンテキストのどれをその瞬間に適切としあるいは利用しているのかを、その活動の中で協同で表示し合っているのかということ、一つ一つ丹念に調べていくことで初めて言えることなのであると思う。

図4 Mの発話（「質問」）の段階でレリヴァントなカテゴリー対

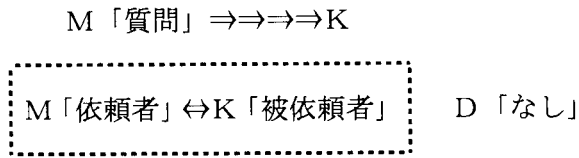
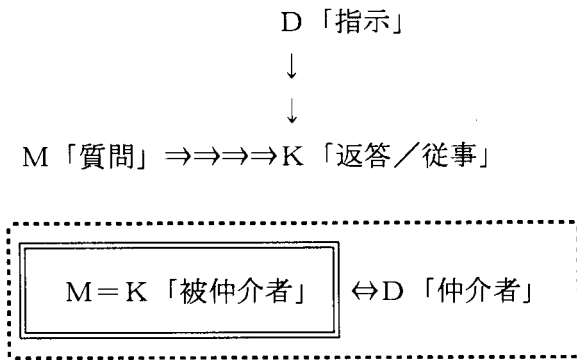


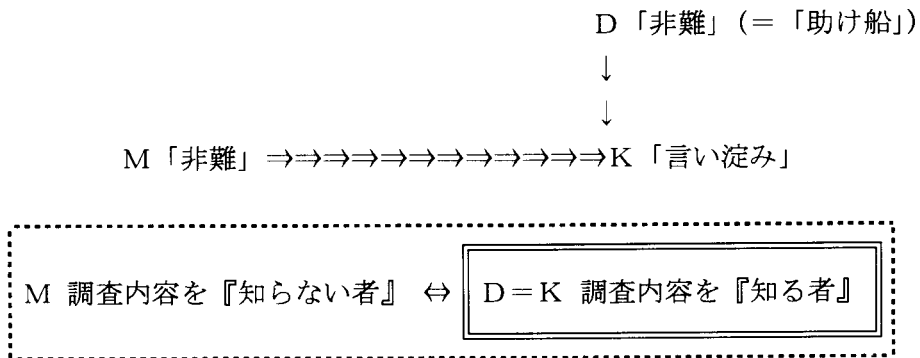
図5 Dによる修正によってレリヴァントになったカテゴリー対



○図の見方

- ⋯⋯⋯⋯ : 相互行為上、有意味（レリヴァント）になっているもの
- ===== : 相互行為上、同じカテゴリーに属するもの
- ⇔ : カテゴリー対
- ⇒ : 矢印先の人物への志向
- : 矢印先の人物への、時間的に「⇒」よりもあとの、志向

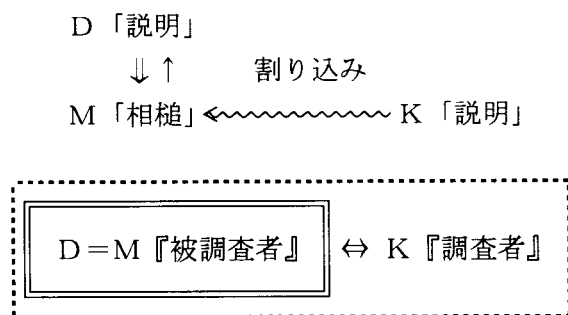
図6 Dの「助け船」によってレリヴァントになっているカテゴリー対



○図の見方

図5に同じ

図7 Kの「割り込み」によってレリヴァントになっているカテゴリー対



○図の見方

~~~~~> : 矢印先の人物への、時間的に「→」よりもあとの、志向  
 以下、図5に同じ

#### 4章 「同性愛者であること」を行うこと

3章では、カテゴリー適用の「適切さ」と「正しさ」との違いについて述べ、今回の調査が同性愛者を対象としたものであるからといって、そこでの参与者たちのやり取りの中で、必ずしも「同性愛者」カテゴリーが適切になっているというわけではないことを示した。そこでこの章では、それでは「同性愛者」カテゴリーがどのようにして適切になっているのかを示し、カテゴリーが適切であるということはどういうことなのかを示したいと思う。

以下のトランスクリプトは、D氏の紹介でM氏が経営するショットバーYを訪れたときに、私を含めた三人の会話を録音したものの会話データであり、MがKに、〈ゲイの時代背景〉について説明している場面である。

#### データ2 (タイプ2-8/8 ③B面)

- 1 D :  
 M : このゲイのことに関してもさ: (.) 時代背景とかさやっぱりいろんなことがあ  
 K :
- 
- 2 D :  
 M : って昔からそういうのってあれでしょ? それこそ昔は寺子屋に入って修行した  
 K :
- 
- 3 D : 〃お小姓さんとかね↑  
 M : りとかさ::勉強したりとかしてたじゃないよく:: う:ん  
 K : あ::
- 
- 4 D : //みんなやってたじゃない↑  
 M : (.) そ//ん時は そんな時はあれよ (.) とりあえずお尻  
 K : うん

- 5 D : あっそうなんだ:: へ::  
M : の穴にちっちゃい木型入れられるのよ:: そうだよ:: だっ  
K : へ::
- 
- 6 D :  
M : て女は ( ) ばかりって言うからエッチしちゃいけないんだよね↑今は違う  
K :
- 
- 7 D :  
M : けど (1) でそれをどんどんデカイのにしていくの::hh うん: (1) う:んで  
K : へ::
- 
- 8 D :  
M : もそのホモでもないけど男性とセックスしてたりする人もいるんじゃないの?  
K :
- 
- 9 D :  
M : それは昔はセックスとはもちろん呼ばないだろうし::そんなの逆に当たり前 hh  
K :
- 
- 10 D :  
M : だったんじゃないの (中略) それはやらしいものであるとか汚れたも  
K :
- 
- 11 D : え:://ぼくそれ初めて聞きました:: じゃ何 (.) お小姓さ  
M : のではないから //うん うん  
K : あ::
- 
- 12 D : なんかそういうのやってたんですか? =いるじゃないお小姓さんてあ  
M : うん::=  
K :
- 
- 13 D : の::何だっけあのね:徳川//家康なり豊臣//秀吉なりなんかあの//武将とかが::横  
M : //うん //うん //うん  
K :
- 
- 14 D : に男の子がこんな槍持ったり//とかして= あれはみんな戦争  
M : //う::ん  
K : =あっはいはいはい

---

1 5 D : とかあの.: (. ) ねっ戦場とかに行ってお殿様とかがねっその性処理を それ  
M : うん  
K :

---

1 6 D : はもう当たり前のように:  
M :  
K :

---

昔、寺子屋で修行したり勉強したりしていた子供達は、お尻にちっちゃい木型を入れられていたという例をあげて、昔は同性愛ということとは無関係に、男性同士で性行為を行うことはやらしいものであるとか汚れたものではなかったのだ、ということMは語って聞かせている。このことを知らなかったDは、武将の性処理役であった小姓もお尻の穴に木型を入れられていたのか、ということについてMに尋ね、その後でKに小姓についての詳細を説明している。これがデータ2のあらすじである。

この一連の会話の中でMとDは、まさしく「同性愛者」として同性愛にまつわる「知識」をKに語る事が期待されている。つまり、彼らは同性愛者に関する「知識」を所有している者として振る舞わなければならない。このように言えるのは次のことからである。このことを説明する際に、私は〔西阪、1997a : 80-87〕の議論を参考にしようと思う。

今回の調査の中で、実はDとM自身が「同性愛者」であることは、はっきり語られることはない。しかし、本当に彼らが「同性愛者」であるかどうかとは別に、DとMは有意味な仕方で「同性愛者」である。つまり、「大人」「日本人」などである以上に、この調査にとって有意味（レリヴァント）なしかたで「同性愛者」である。実際、私がこのトランスクリプトの録音データを聞くと、彼らが同性愛者であることを疑わないだけでなく、彼らが「同性愛者」であることは、この録音データを聞くという私の活動にとって重要な資源となっている。つまり、〈「同性愛者」なるDとMが「非同性愛者」なるKに「同性愛（者）」について聞く〉という事態は、この相互行為（録音データ）に外在的な基準（戸籍、出生など）とは無関係である。むしろ、その事態は、その相互行為そのものの具体的な展開の中で、それを通して組織されるのである。DとMが「同性愛者である」ことは、相互行為的に達成されるのだ。

DとMは、確かに、しばしば「ゲイ」「ホモ」といった「同性愛者」と同じカテゴリー集合に属するカテゴリーをもちいる。しかし、彼らは自分自身を「同性愛者」というカテゴリーで指すことはない。彼らは一般的に、同性愛と同性愛者について語るだけである。にもかかわらず、このトランスクリプト内において、DとMが有意味なしかたで「同性愛者である」のはいかにしてか。

サックスは、カテゴリーに関する議論〔cf. Sacks, 1972〕の中で「カテゴリーに結びついた活動（category-bounded-activity）」ということ述べている。その「カテゴリーに結びついた活動」とは、カテゴリー（の担い手）は、とりわけ同じ集合のカテゴリー（の担い手）に対し特定のかかわり方をすることが、一般的に、もしくは規範的に期待されている、というものである。つまり、特定のカテゴリーには一定の活動が結びついているのだ。例

例えば、「赤ちゃん」は「泣く」、「日本の学生」は「勉強しない」などである。さらに、その活動の結びついている当の категорияが所属するのと同じ category 集合の、他の category に向けられることが期待されているものもある。例えば、「親」は「子供」の「世話をする」ように期待されているなど [cf. 西阪 1997a : 82 参照]。

では、同性愛者と非同性愛者との間に、どのような関係(活動)が一般的に期待されているのだろうか。それは、同性愛者は同性愛者と同性愛にまつわる知識(現状、意識、ネットワーク、歴史)について、非同性愛者よりも優先的に報告する資格を持つという期待である。これは category 対ということに由来する。もちろん、このことは、同性愛者のほうが実際に非同性愛者よりも同性愛のことや同性愛者、そして同性愛者であるがゆえに遭遇するトラブルについて、よく知っている、ということの意味しない。これはあくまでも期待である。しかも規範的な、すなわち事実と無関係に維持される期待である。実際、Dは同性愛者の権利獲得運動に関する事柄についてほとんど知らなかった。しかし、重要なのは、同性愛者は同性愛者であるがゆえに、知識の量や語る内容の真偽とは独立に、そのことを語る優先的資格を持つことがある、ということだ。つまり、D、MとKがそれぞれレリヴァントな仕方、「同性愛者」であり「非同性愛者」であるのは、D、MとKが同性愛者と非同性愛者の(上記のような)期待される関係のうちに自分達を(相互行為の具体的展開を通して)位置づけていくことによって達成されるのだ。逆に言えば、D、MとKが同性愛者と非同性愛者の期待される関係のうちに自分達を位置づけていくことで、この場の「同性愛者」「非同性愛者」という category を有意味なものにしているのだ。それ故に、この一連の会話の中でMとDは、まさしく「同性愛者」として同性愛にまつわる「知識」をKに語ることを期待されており、同性愛者に関する「知識」を所有している者として振る舞わなければならない、とすることができるのだ。そして、このことは相互行為の具体的進行の上に、観察可能なかたちで実現している。

まず、Dは「お小姓さんとかね」(3段目D行)「みんなやってたじゃない」(4段目D行)とKに向けて発話している。これは「お小姓さん」という「寺子屋の子供」に話題上繋がりのあるものを、Mの説明の補足として、提示することで、同性愛者ならば(ゲイの時代背景)を語れるであろう期待にMだけでなく自分も答えられるのだ、ということを表示し、「同性愛者である」ことを維持している。

だが、その信頼が5段目D行で危ういものになってしまう。「あっそうなんだ!!」というDの発話がそれだ。この発話によって、Dの同性愛者に関する「知識」の欠如が露見してしまう。だが、それでも「あっ」という驚きの表示をすることで、Mの発話を驚きに値するもの、知らなくても仕方がないものとして扱い、この危機をうまく回避している、またそれだけでなく、そのあとに「そうだよ!!」とDの「知識」の欠如を批判することで、Mもその回避に協力している。だが、このように「同性愛者」間における「知識」の非対称性が有標化 (marked) されてしまうと、Mが語ったゲイの時代背景に関する事実の真実性が疑わしいものになってしまう。というのも、同 category 間には、同性愛(者)のことを語る優先的資格が期待されてないため、事実の真偽を判断するための基準が存在しないからだ。そのため、その後理由を表す接続詞「だって」を用いて理由を述べることで、自分自身の発言に正当性を持たせているのである。

1 1段目D行の「え!!ぼくそれ初めて聞きました!!」についても5段目D行と同じこと



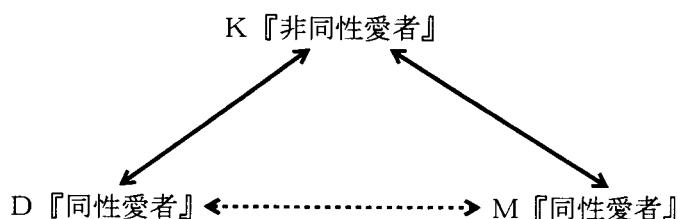
が言えるであろう。そしてそれに続く「じゃ何（.）あのお小姓さんとかもそういうのやっていたんですか？」（11段目D行）というDの発話は、〈ゲイの時代背景〉について説明するための発話（「いるじゃない・・・」（12段目D行））の権利を獲得するために、行われたものであると考えられる。同性愛者ならば持っているであろう「知識」の共有者としてMを取り込むことで発話権を獲得し、〈ゲイの時代背景〉の話題を続けることで、まともな「同性愛者」たろうとしているのである。以上のことをまとめると図8のようになる。

この一連の会話では、Mが持っている同性愛者に関する「知識」をたまたま共有していなかったDが、Mと協同でなんとかその場を切り抜けることで「同性愛者」であることを維持しようとしている様子が確認された。

そして、このことから2章で述べた、カテゴリー化は必ずしも人々の意図によって行われているのではない、ということが分かっていただけだと思う。つまり、ここでのDがレリヴァントなしかたで「同性愛者」であるのは、MやKがどう応答してくるかに、どこまでも依存するからだ。

このように、そのつどそのつどの振る舞いの中で、カテゴリーの担い手間の関係に関する一般的期待に従うことで、彼らは「同性愛者である」ことを協同で成し遂げているのである。つまり、「同性愛者である」ことは彼らがこの場で実際にやっていることなのだ。

図8 『同性愛者』－『非同性愛者』カテゴリーの協同的達成



○図の見方

- 『 』 : この場でレリヴァントになっているカテゴリー
- ←→ : カテゴリーの担い手間の中に、同性愛にまつわる知識について優先的に報告する資格を持つという期待、があることを示す
- ←-----> : カテゴリーの担い手間の中に、上記のような期待がないことを示す

5章 結語

以上、私はサックスの提案した会話分析（あるいは相互行為分析）という手法から、〈同性愛者〉カテゴリー、すなわち同性愛者が〈同性愛者〉であることが、当の参与者たちにとって、また彼らのやりとりの中で、どのようにして有意味（レリヴァント）となっているのか、を実際の現象を通して示してきた。3章では、佐藤の議論及びレイベリング論が背理であることについて述べた。4章では、どのようなカテゴリーが適切になるかは、その都度その都度の相互行為の具体的展開におけるさまざまな偶然的条件に依存していること、そしてカテゴリーの適切さというものは、会話という相互行為の中で、参与者がある

カテゴリーを適切なものとするのに無限に存在するコンテキストのどれをその瞬間に適切としあるいは利用しているのかを、その活動の中で協同で表示し合っているのかということ、一つ一つ丹念に調べていくことで初めて言えることである、ということについて述べた。5章では、「同性愛者」カテゴリーの担い手は、カテゴリーの担い手間の関係に関する一般的期待に従って、一定の知識・経験を優先的に報告する権利を互いに配分し合うことにより、「同性愛者」であることを協同的に成し遂げていること、そして「同性愛者である」ことは彼らがこの場で実際にやっていることである、ということについて述べた。

私はこの論文の中で、同性愛者の持つ一般的性格や同性愛の本質などには一切触れなかった。それは触れそびれたのではなく、恣意的に触れなかったのだ。というのは、カテゴリーの一般的性格をもれなく厳密に書く尽くすなどといったことは不可能であるからだ。そのようなことは原理的に無理なのだ。たとえば、あるカテゴリーの一般的性格を記述したとする。しかし、その記述が、まさにそのカテゴリーの一般的性格の記述であること、このことが証明（これを証明1とする）されなければならない。すると今度は、その証明1が、まさにその記述がそのカテゴリーの一般的性格の記述であることの証明であること、このことが証明（これを証明2とする）されなければならない。そして、今度はその証明2が、その証明3が、その証明4が、その証明5が……。これでは、いくら説明しても被説明項目が増えるばかりで、いつまで経っても当の一般的性格には到達しない。このように、あるカテゴリーの一般的性格を記述することは、かの無限後退を産み出してしまう。[cf. 浜、1995: 69] も言うように、実は、日常生活の秩序には根拠なるものは存在しない。すなわち、日常生活の秩序は底が抜けているのだ。つまり、こう言うことだ。相互行為は（あるいは、社会秩序は、と換言してもよいだろう）、“私はあなたが意図していることを知っている”という期待、それもその下が無底の深淵になっている期待にもとづいて進行しているのだ。それ故に、カテゴリーの一般的性格を書き出し、カテゴリーの一般的性格を要因としてカテゴリーの担い手のとった行動を説明する（例えば、同性愛者は・・・であるから・・・のような行動をとった、外国人は・・・であるから・・・のような行動をとった、などというもの）などといったことは、極めてナンセンスなことであるのだ。カテゴリーの一般的性格などに訴えることはおよそ無知の表明でしかない。それ故、カテゴリーの持つ一般的性格や本質などといったことには、これっぽっちも関心がないのだ。

このように考えるとき、何故同性愛者を扱ったのか、カテゴリー論を述べる上で同性愛者を対象として扱う必要があったのか、対象は何でもよかったのではないのか、と思われるかもしれない。しかし、そうではない。私は、相互行為の中に埋め込まれているカテゴリーが、そのつどその場その場で編み出されていく様子を示す試みにおいて、〈同性愛者〉カテゴリーのその様子を示したこと、このことが重要なのだ。

同性愛者を対象とした従来の社会学（社会運動論、セクシュアリティ論等）では、あたかも物理的に存在するかのように同性愛者を扱ってきた。というのは、従来の社会学が言語的転回<sup>(8)</sup>以前の近代哲学に基づくものであるからだ。しかし、言語論的転回が見せたように、社会というものが人々の意識からは成り立っていない以上、もう私たちは人々の意識を社会を知るための前提条件にしてはならない。したがって、私の研究の特色は、

人々の意識を前提とせずに社会秩序を記述したことにあると言える。

注

- (1) このような研究は同性愛者を対象としたものに限らず、ホームレスや移民などを対象としたものにも多く見受けられる。
- (2) ポジティブ（肯定的）／ネガティブ（否定的）とは、[佐藤恵 1996]によると、付与されるカテゴリーに随伴する人格評価が、社会的価値規準に照らして肯定的／否定的の評価であると、被付与者（被レイベリング者）が感受すること、である。
- (3) ここで言う「期待」とは、人々に利用可能な「知識」のことであり、経験的事実とは無関係に維持される可能性を持つ [西阪、1997a : 83]。
- (4) トランスクリプトは、一つの選択的な代表にすぎない。どの音声まで文字に写し取るか（背景の声はどうするか、そもそも何を「背景」とみなすか）、テキストの中にトランスクリプトを提示するとき、どの範囲を切り取るか、ということになれば、なおさらである。しかし、トランスクリプトが選択的であることは、会話分析の目的にとって、なんの障害でもない。成員自身によって社会秩序がそのつどその場その場で（「局所的に」）編み出されていく様子を、実際に示して見せようとしているだけである。このことで、何か仮説を「実証」しようとしているのではない。むしろ、成員自身にとっての社会秩序について一定の感覚（センス）を得ることが目指されているのだ。トランスクリプトは、そのための、あくまでも補助的な、しかし必要な手段である [西阪、1997a : 37]。

○トランスクリプトで用いられている記号の説明

／／ 連続のスラッシュ :

参加者たちのことばが重なっていることを示す（重なるの終わる箇所は示されないこともある）。

= ことばとことばのあいだ、もしくは行末と行頭におかれた等号 :

途切れなくことばもしくは発話がつながっていることを示す。

( ) 丸括弧 :

何かことばが発せられているが、聞き取り不可能であることを示す。また聞き取りが確定できない場合は、当該文字列が丸括弧で括られる。

(数字) 丸括弧で括られた数字 :

その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。また、ごく短い間合い

は「(.)」という記号で示される。

：： コロンの列：

直前の音が延ばされていることを示す。

? 疑問符：

語尾の発音が上がっていることを示す。

(↑) 上向き矢印：

音調が極端に上がっていることを示す。

hhh h の列：

吸気音を示す

(5) やり取りの中で逐次変化していく、現在語られていることに対して、語り手及び聞き手の関係 [西阪、1998 : 223]。

(6) シェグロフとサックスの有名な定式によれば、隣接ペアは次の5つの特徴を持つ。  
①二つの発話(順番)からなる。②この二つの発話(順番)は隣接している。③この二つの発話はそれぞれ別の話し手によって産出される。④二つの発話はそれぞれ第一成分と第二成分として順序が決まっている。⑤ペアとして類型化されている。つまり一定の発話があれば、次に来るべき発話タイプが限定される。例えば、質問と返答、依頼と受諾もしくは拒否、非難と言い訳もしくは謝罪などが、隣接ペアである [西阪、1995 : 7 - 136]。

(7) サックスらは、発言順番の交替の仕方を次のようなルールセットとして定式化している。

規則1 ; 現在の順番における発言が最初の区切りに至ったとき、

(a) - 他者選択

もしそれまでに、現在の話し手自身が次の話し手を選択したならば(呼びかけ+質問等により)、その選択されたものは、次に順番をとって発言する権利をえ、かつその義務を負う、そして順番は替わる。

(b) - 自己選択

もしそれまでに、現在の話し手が次の話し手を選択しなかったならば、現在の話し手以外の者が自分で自分を次の話し手として選択してよい。そのとき最初に話し始めた者が、次の順番をとる権利をえる。そして順番は替わる。

(c) - 自己継続

もしそれまでに、現在の話し手が次の話し手を選択することなく、かつ現

在の話し手以外の者で、自分で、自分を次の話し手として選択する者もないならば、現在の話し手が話し続けてよい。

規則2：もしその最初の区切りにおいて、規則1 (a) も規則1 (b) も起こらず、結局規則1 (c) に従って現在の話し手が話し続けることになるならば、規則1の (a) ~ (c) が次の区切りで再び適用される。そして最終的に順番が達成されるまで、同じことが繰り返される。

私たちは、この順番取りシステムのように定式化されたルール群を、発言の交替のたびに参照しているわけではない。このルール群は、あくまでも、私たちが日常において実際にやっていること(実践)を記述したものなのだ、と考えるのがよい [cf. 西阪 1995 : 7 - 102-103] [cf. 山田 1999 : 5-6]。

- (8) 近代哲学と現代哲学とを画する分水嶺をとなる動向を表す概念。デカルトの〈コギト〉の自覚に始まる近代哲学は、〈意識〉を確実な認識の最終的な基盤として中心にすえ、反省的方法によって、意識が世界を意味づけ、構成する過程を解明することに努めてきた。しかし、この意識中心の哲学は、意識の私秘性という壁に阻まれて、〈不可知論〉あるいは〈独我論〉というアポリアに陥らざるをえなかった。それに対して、19世紀末から20世紀初頭にかけて現れた一群の哲学者達は、〈意識〉という自己完結した世界からの脱出路を公共的な〈言語〉のなかに求めた。いわば、哲学的議論の土俵を〈意識〉ではなく〈言語〉という場面に転換したのである。[木田 他編、1997 : 319]

#### 参考文献

- 阿部耕也 1999 「〈子供〉の見つけ方」, 好井・山田編『会話分析への招待』: 101-123, 世界思想社。
- 現代思想臨時増刊号 1997 『レズビアン／ゲイ・スタディーズ』25-6, 青土社。
- 浜日出夫 1995 「ガーフィンケル信頼論再考」, 『年報筑波社会学』7 : 55-74。
- 木田元 他編 1997 『コンサイス 20世紀思想事典 第2版』, 三省堂。
- 串田秀也 1999 「助け船とお節介」, 好井・山田編『会話分析への招待』: 124-147, 世界思想社。
- 宮内洋 1998 「外国籍園児のカテゴリー化実践」, 山田・好井編『エスノメソドロロジーの想像力』: 187-202, せりか書房。
- 中河伸俊 1998 「レイベリングからトラブルの自然史へ—逸脱と社会問題の研究へのエスノメソドロロジーの影響」, 山田・好井編『エスノメソドロロジーの想像力』: 105-120, せりか書房。
- 中野卓・桜井厚 1995 『ライフヒストリーの社会学』, 弘文堂。
- 西阪仰 1995a「連載・〈会話をフィールドにした男〉サックスのアイデア」, 『月刊言語』24-7。
- 西阪仰 1995b「連載・〈会話をフィールドにした男〉サックスのアイデア」, 『月刊言語』24-8。
- 西阪仰 1995c「連載・〈会話をフィールドにした男〉サックスのアイデア」, 『月刊言語』24-9。
- 西阪仰 1995d「連載・〈会話をフィールドにした男〉サックスのアイデア」, 『月刊言語』

24-10。

西阪仰 1995e 「連載・〈会話をフィールドにした男〉 サックスのアイデア」, 『月刊言語』

24-11。

西阪仰 1996 「差別の語法」, 栗原彬編『講座 差別の社会学 第1巻』: 61-76, 弘文堂。

西阪仰 1997a 『相互行為分析という視点』, 金子書房。

西阪仰 1997b 「3章 会話分析になにができるか」, 奥村隆編『社会学になにができるか』  
: 115-154, 八千代出版。

西阪仰 1998 「概念分析とエスノメソドロジー」, 山田・好井編『エスノメソドロジーの想像力』: 187-202, せりか書房。

大村英昭・宝月誠 1979 『逸脱の社会学』, 新曜社。

Sacks, Harvey 1972 “An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology” ,in Sudnow, David. (ed.) *Studies in Social Interaction*, The Free Press : 31-73 (= 1995 北澤・西阪訳 「会話データの利用法—会話分析事始め」, 『日常性の解剖学』: 93-173, マルジュ社)。

佐藤恵 1996 「ポジティブ・レイベリング」, 『ソシオロギス』 20 : 115-127。

Schegloff, Emanuel A 1987 “Between Micro and Macro: Contexts and Other Connections” in Jeffrey C. Alexander, Bernhard Giesen, Richard Munch, Niel J. Smelser (ed.) *The Micro-Macro Link*, University of California Press (= 1998 石井幸夫訳 「マイクロとマクロの間—コンテキスト概念による接続策とその他の接続策」, 『マイクロ・マクロ・リンクの社会理論』: 139-178, 新泉社)。

Shrock, W.W 1974 “On Owning Knowledge” ,in Turner, Roy. (ed.) *Ethnomethodology*, Penguin Books : 45-53 (= 1995 岡田光弘訳 「知識を所有することについて」, 『年報筑波社会学』 7 : 91-107)。

中央大学文学部社会学科・矢島ゼミナール同性愛調査研究会 1996 『同性愛者のライフヒストリーⅢ』。

Watson, Rod “Some General Reflections on ‘Categorization’ and ‘Sequense’ in the Analysis of Conversation” in Hester, S., P. Eglin. (ed.) *Culture in action: studies in membership categorization analysis*, Washington, D.C.: University Press of America : 49-75。

山田富秋 1999 「会話分析を始めよう」, 好井・山田編『会話分析への招待』: 1-35, 世界思想社。

山崎敬一 1994 「エスノメソドロジーと性別カテゴリーの問題」, 山崎敬一・山崎晶子『美貌の陥穽』: 5-30, ハーベスト社。

好井裕明 1999 「制度的状況の会話分析」, 好井・山田編『会話分析への招待』: 36-70, 世界思想社。

#### 謝辞

D氏、M氏、S氏には、お忙しい中調査に協力して下さったことに、心より感謝したい。浅智恵の私に、熱心に大変勉強になるお話をして下さいにもかかわらず、その会話データをもちいなかったS氏に対しては深く謝意を表したい。